

資料

学生の授業評価を正確に反映する評価項目について —平成22年度開講の授業科目における学生による授業評価アンケート得点の傾向から—

金城忍¹ 嘉手苺英子¹ 高橋幸子¹ 賀数いづみ¹ 渡久山朝裕¹ 金城芳秀¹

キーワード：授業評価アンケート、評価項目

I はじめに

大学の授業を改善するには適切な授業評価が必要である。授業評価では、評価の主体によって『他者評価』と『自己評価』とに分かれ、『他者評価』としては、(1) 完全な第三者による評価、(2) 授業を受けた学生による評価がある¹⁾。米国においては20世紀初頭より体系的な教員評価が実施され、その中で授業評価は教員の研究能力の評価と並ぶ重要なものとして位置づけられている²⁾。日本では、平成3年の大学設置基準の改定によって、自己点検・自己評価・FDの重要性が示されたことが、授業評価の実施を促した³⁾。授業評価は、独立行政法人大学評価・学位授与機構の示す機関別認証評価の「基準6-6-1-②：学習の達成度や満足度に関する学生からの意見聴取の結果等から判断して、学習成果が上がっているか」の根拠資料として用いられることから、その重要性は明らかである。

授業評価について文部科学省高等教育局は、国公私立大学753大学を対象に調査を実施し、報告した⁴⁾。報告書では、学生による授業評価は国立65（約76%）大学、公立61（約79%）大学、私立473（約80%）大学にて実施されていた。しかし評価項目においては、「授業の分かりやすさ」を716大学が取り上げている一方、「教室の広さ、空調などの物理的環境」については262大学が取り上げており、各大学の評価項目に差が見られている。ここで関内ら⁵⁾は、評価項目について「構成はどの大学も

『I. 自己評価』、『II. 授業評価』、『III. 全体評価』、『IV. 自由記述欄』を基本に行っているが、設問の文章は当然のことながら多岐にわたる」と述べ、さらに29大学の授業評価項目が2項目から31項目であったことも述べている。

沖縄県立看護大学（以降、「本大学」とする）の授業評価の各項目は、文献や他大学での実施内容を参考に、現在、38の評価項目にて実施している（図1）。評価項目の内容は、Question（以降、「Q」とする）1～Q7で学生自身の授業への取り組みについて、Q11～Q29では授業内容・方法の評価、Q8～Q10、Q30～Q38では授業の全般的評価を問うている。学生は38項目に対して、「5.強くそう思う」「4.そう思う」「3.どちらともいえない」「2.そう思わない」「1.全くそう思わない」の5つの選択肢から回答する。授業評価アンケートは、期末試験実施前の最後の授業終了直前に、本大学学務課によって配布後、目的、記入方法、回収方法の説明がなされる。さらに評価にバイアスがかからないように、科目に関係する教員は学生の回答時、その場に同席しないように配慮している。なお本大学の授業評価は「記名式」となっている。しかし「記名式」「無記名式」の要因が自己評価に影響を与えない⁶⁾、⁷⁾ことから、本大学の「記名式」が評価に及ぼす影響は少ないと考えられる。

このような状況で実施されたアンケート結果に対して、筆者自身の担当科目の授業評価は「Q9.この科目の勉強はやさしかった」、「Q10.この科目で良い成績をとるのは容易だ」の評価平均点が常に

¹ 沖縄県立看護大学

3.0以下であった。しかしその他の評価項目の評価平均点は、4.0以上である。この傾向は、共同研究者らも同様であった。評価項目の平均値が4.0未満は、その評価項目に対して「そう思う」のではない、と捉えていると考えられる。このように「Q9」「Q10」の評価項目の平均点が常に3.0以下で、その他の評価項目の平均点は4.0以上の傾向から、評価項目として適切なのかどうかの疑問が生じた。そこで本大学全科目における授業評価各項目の得点の偏りや傾向を明らかにし、評価項目改善の資料にすることを目的に、本研究に取りかかった。

II. 研究方法

1. 用語の操作的定義

本大学では平成23年度入学生より新カリキュラムが開始された。平成22年度のカリキュラムでは、科目が「基本科目・専門支持科目・専門科目・統合科目」の4群に区分されている。しかし新カリキュラムでは「教養科目・専門関連科目」の2群に区分されている。今回、学年別、科目の群別に授業評価各項目の得点の偏りや傾向を見ていく。さらに科目の群別において、必修と選択でも異なる得点の偏りや傾向が見られるのではないかと考え、全学年が同じカリキュラムでの比較が必要と考えた。また講義・演習科目と実習科目では授業評価アンケート用紙が異なる（図1、図2）ことや、1つの実習科目では、数人の実習指導教員が関わりあっているため、その評価を判断するのは難しい。

そこで研究対象を平成22年度開講の実習科目以外の基本科目28科目、専門支持科目28科目、専門科目41科目、統合科目4科目の合計101科目の授業評価アンケート結果とした。しかし学年別、必修・選択別、科目の群別に区分して分析を進めていくと、2年次必修の基本科目、3年次選択の専門支持科目、4年次必修の基本科目と選択の専門支持科目は、それぞれ1科目しかなく、特定の科目名が判明すると考えられた。そこでそれら4つの

科目は研究対象から除外した。さらに、2科目の専門科目、3科目の統合科目の授業評価結果が出ていなかった。そこで92科目を分析対象とした。なお92科目を受講した学生ののべ人数は5,671名、授業評価回答数（以降、「N」とする）は5,667枚であった。

2. 分析方法

1) 各科目の基本属性として、「開講学年」、「必修科目・選択科目」、「基本科目・専門支持科目・専門科目・統合科目」の区分を入力し、評価項目毎の平均値を入力する。なお「統合科目」は科目数が少ないことから、「専門科目」として扱った（以降、基本科目・専門支持科目・専門科目の各科目の群を区別する場合には、「領域別」と記す）。

2) 開講科目に対して、受講学年別、および必修科目と選択科目別、および必修科目、選択科目別に領域別を重ねて区分し、評価項目毎に平均点を算出する。

3) 2)にて得られた結果から、平均点が4.0未満の評価項目に注目し、それら評価項目の内容から評価項目改善について考察する。

3. 研究協力者

データ収集は、初めに学長へ研究の主旨・概要を説明し、承諾を得た後、教務委員長を通して平成22年度授業評価結果の入手を依頼した。その後、学務課長へ研究の主旨・概要を説明し、「学生による授業評価」結果の「授業科目名」、「教員名」の欄を塗りつぶし、その資料の余白部分に、「開講学年」、「必修、選択の区分」、「領域（基本科目・専門支持科目・専門科目）」を記入した紙ベースのデータの作成を依頼した。なお本研究は、沖縄県立看護大学研究論理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号10025）。

沖縄県立看護大学紀要第14号 (2013年 3月)

年次	学籍番号	名前
----	------	----

学生による授業評価アンケート

平成 年 月 日

このアンケートは授業（講義、演習）に対するあなたの評価を真摯に受け止め、今後の授業へ活用したいと思って実施しています。以下の質問に率直にお答え下さい。
※回答の選択肢は5つ（5. 強く思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない）あります。 その一つを記入して下さい。

※数字記入例
0
1
2
3
4
5
6
7
8
9

科目コード:

科目名:

教員名:

1 この授業によく出席した	5 4 3 2 1	14 教員の熱意が感じられた	5 4 3 2 1	27 ポイントをおさえてくれた	5 4 3 2 1
2 この授業に遅刻をしたことがない	5 4 3 2 1	15 丁寧に、わかりやすい授業であった	5 4 3 2 1	28 授業に活気があって単調ではなかった	5 4 3 2 1
3 授業中、私語をかかわしたこともなく、授業態度はよかった	5 4 3 2 1	16 私たちの理解度に配慮した授業の進め方であった	5 4 3 2 1	29 授業内容の量は適切であった	5 4 3 2 1
4 この科目の予習、復習をした	5 4 3 2 1	17 質問に明快な回答を与えてくれた	5 4 3 2 1	30 授業内容のレベルは適切であった	5 4 3 2 1
5 教員に求められたこと以外に自分で積極的に調べた	5 4 3 2 1	18 私語に対して適切に対処してくれた	5 4 3 2 1	31 この科目の受講後、この科目に対する興味は増加した	5 4 3 2 1
6 この科目の勉強のために図書館をよく利用した	5 4 3 2 1	19 学習の目標をはっきり示してくれた	5 4 3 2 1	32 自分自身と他の学生との共通点・相違点があった	5 4 3 2 1
7 教員に積極的に質問をした	5 4 3 2 1	20 教員の話し方は明瞭で、聞き取りやすかった	5 4 3 2 1	33 この科目を受講して満足であった	5 4 3 2 1
8 この科目はもともと興味のある科目である	5 4 3 2 1	21 教員の話す速度は適当であった	5 4 3 2 1	34 この分野の見方、考え方を学ぶことができた	5 4 3 2 1
9 この科目の勉強はやさしかった	5 4 3 2 1	22 板書は適切で効果的であった	5 4 3 2 1	35 この科目を受講して今後の勉強に役立つと思う	5 4 3 2 1
10 この科目で良い成績をとるのは容易だ	5 4 3 2 1	23 教科書・配布資料の使い方は効果的であった	5 4 3 2 1	36 この科目を受講して、触発されることが多かった	5 4 3 2 1
11 教員の休講は少なかった	5 4 3 2 1	24 視聴覚教材の使い方は効果的であった	5 4 3 2 1	37 この科目を受講して他の学生にも勧めたい	5 4 3 2 1
12 授業時間や場所の変更など学生への連絡が適切であった	5 4 3 2 1	25 課題（宿題・レポートなど）の量は適当であった	5 4 3 2 1	38 教室の広さは講義に適当であった	5 4 3 2 1
13 計画された授業が予定通りに行われた	5 4 3 2 1	26 この授業は全体としてよくまとまっていた	5 4 3 2 1		

※11Bの鉛筆で記入すること。
※訂正は消しゴムできれいに消し、消し屑を残さないこと。

◆以上のアンケートの内容以外に、この授業に関する意見、要望、提案 などがあれば、ご自由にお書き下さい。

記入例) 授業評価が5の時 5 4 3 2 1

ご協力ありがとうございました。 全学自己点検・評価検討委員会

図1 講義・演習における授業評価アンケート用紙

学生による授業評価(臨地実習)アンケート

年次	学籍番号	名前
----	------	----

平成 年 月 日

このアンケートは授業（実習）に対するあなたの評価を真摯に受け止め、今後の授業へ活用したいと思って実施します。以下の質問に率直にお答え下さい。
※回答の選択肢は5つ（5. 強く思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない）あります。 その一つを記入して下さい。

※数字記入例
0
1
2
3
4
5
6
7
8
9

科目コード:

実習科目名:

実習指導教員名:

1 必要に応じてオリエンテーションを受けられる機会があった	5 4 3 2 1	14 教員は、学生が困っているときに助けてくれた	5 4 3 2 1	27 教員から、記録物や提出物に対して、適切な指導・助言があった	5 4 3 2 1
2 オリエンテーションの内容は、実習を円滑に行うために役立った	5 4 3 2 1	15 教員は、学生の個別性に合わせて指導していた	5 4 3 2 1	28 教員が実習時間をせよみに甲めることや、終了時間を延長・短縮することはなかった	5 4 3 2 1
3 学習目標にそって実習を行うことができた	5 4 3 2 1	16 教員は、学生を一人の人間として尊重していた	5 4 3 2 1	29 教員と学生間のコミュニケーションはよくとれていた	5 4 3 2 1
4 実習の対象者に対し詳細・実情・詳細の一面の裏側について説明を行うことができた(受持ちがない場合は考えを要しない)	5 4 3 2 1	17 教員は、どの学生にも平等に接していた	5 4 3 2 1	30 教員は、学生が対象者とうまく関わるように配慮していた	5 4 3 2 1
5 今までの学習内容を活用しながら実習を展開していた	5 4 3 2 1	18 教員は、学生に真剣に関わっていた	5 4 3 2 1	31 教員は、学生がスタッフとうまく関わるように配慮していた	5 4 3 2 1
6 対象者への理解を深め、個別性を考えながら実習を展開していた	5 4 3 2 1	19 教員は、先入観を持たずに学生に接していた	5 4 3 2 1	32 カンファレンス時間は、長すぎること、短すぎることなかった	5 4 3 2 1
7 日々の学習を振り返りながら、それを生かして実習を展開していた	5 4 3 2 1	20 教員は、学生の質問にわかりやすく答えていた	5 4 3 2 1	33 カンファレンスにより、実践した内容を意味づけることができた	5 4 3 2 1
8 対象者とのコミュニケーションを深めながら実習を展開していた	5 4 3 2 1	21 教員は、学生が自分の考えにもとづいて行動することを尊重していた	5 4 3 2 1	34 実習中の記録物・提出物などの量は適切であった	5 4 3 2 1
9 対象者との関係を築きながら実習を展開していた	5 4 3 2 1	22 教員は、実習カンファレンスに参加していた	5 4 3 2 1	35 学生同士が協力しあうことができた	5 4 3 2 1
10 必要に応じて、教員に質問することができた	5 4 3 2 1	23 教員の学生に対する質問の量は、多すぎること少なすぎることなかった	5 4 3 2 1	36 実習では、他の医療従事者の能力が得られた	5 4 3 2 1
11 教員は、学生の必要に応じてアドバイス・指導・説明などを行っていた	5 4 3 2 1	24 教員が学生に期待する行動は、難しすぎることやさしすぎることなかった	5 4 3 2 1	37 スタッフの対象者に対する態度から学ぶ機会が多い実習であった	5 4 3 2 1
12 教員は、学生の意見を聴いた上で、アドバイスや指導を行っていた	5 4 3 2 1	25 教員と施設実習指導者の連携がよくとれていた	5 4 3 2 1		
13 教員の説明は、具体的にわかりやすかった	5 4 3 2 1	26 教員と施設実習指導者の指導の間に一貫性があった	5 4 3 2 1		

※11Bの鉛筆で記入すること。
※訂正は消しゴムできれいに消し、消し屑を残さないこと。

◆以上のアンケートの内容以外に、実習中気づいたこと、感じたことがありましたら記述してください。

記入例) 授業評価が5の時 5 4 3 2 1

ご協力ありがとうございました。

沖縄県立看護大学 自己点検・評価検討委員会

図2 実習科目における授業評価アンケート用紙

Ⅲ. 結果

1. 全学年による必修科目と選択科目および必修科目・選択科目の領域別の平均点について

92科目の分析対象に対して、必修科目52科目(N=4,234)と選択科目40科目(N=1,433)の授業評価アンケートの評価項目毎の平均点を算出した(図3)。その結果、ほとんどの評価項目の平均点は4.0以上と高い傾向を示しており、必修科目と選択科目間での各評価項目の評価得点の傾向に大きな違いはなかった。続いて、全学年の学生による必修科目および選択科目の領域別の評価項目毎の平均点(図4, 図5)については、必修科目, 選択科目の中でも、領域別に異なる特徴が見て取れた。そこで学年毎に「必修・選択別」と「必修・選択別, および領域別の平均点」について述べていく。

2. 学年別における必修科目と選択科目および必修科目・選択科目の領域別の平均点について

開講科目に対して、受講学年別の必修科目と選択科目別, および必修科目, 選択科目別に領域別を重ねて区分し、評価項目毎に平均点を算出した。

平均点が4.0未満となった評価項目を表1に示す。表中のカッコ内に示した数字は科目数, Nは授業評価回答数を示す。また平均点が4.0未満の得点を網掛けで示し, 該当する評価項目を表1の下部に示す。

1) 1年次履修科目について

表1から必修科目と選択科目を比較すると, Q4~Q7では選択科目が低く, Q9~Q10では必修科目が低かった。

必修科目および選択科目毎の領域別では, Q4~Q6は, 選択の基本科目が低かった。しかし必修の専門科目は高かった。Q7では必修, 選択の区別なく専門支持科目が低く, Q8も必修, 選択の区別なく基本科目が低かった。Q9, Q10では, 必修の専門支持科目が低かった。

2) 2年次履修科目について

全科目と必修科目, 選択科目の平均点では, Q2は全科目で4.5であるが, 選択科目が3.8であった。さらにQ4~Q6では選択科目が必修科目より低かった。しかしQ9~Q10では必修科目が選択科目より低かった。

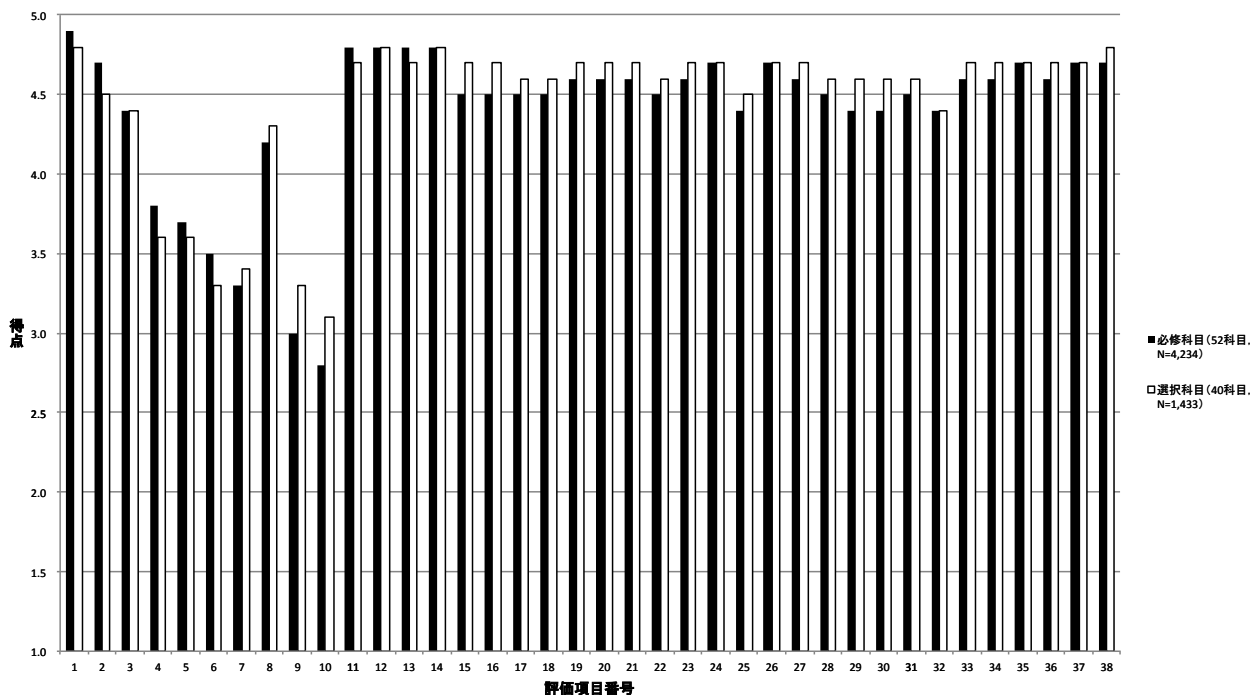


図3 授業評価項目毎の平均点【必修科目、選択科目】

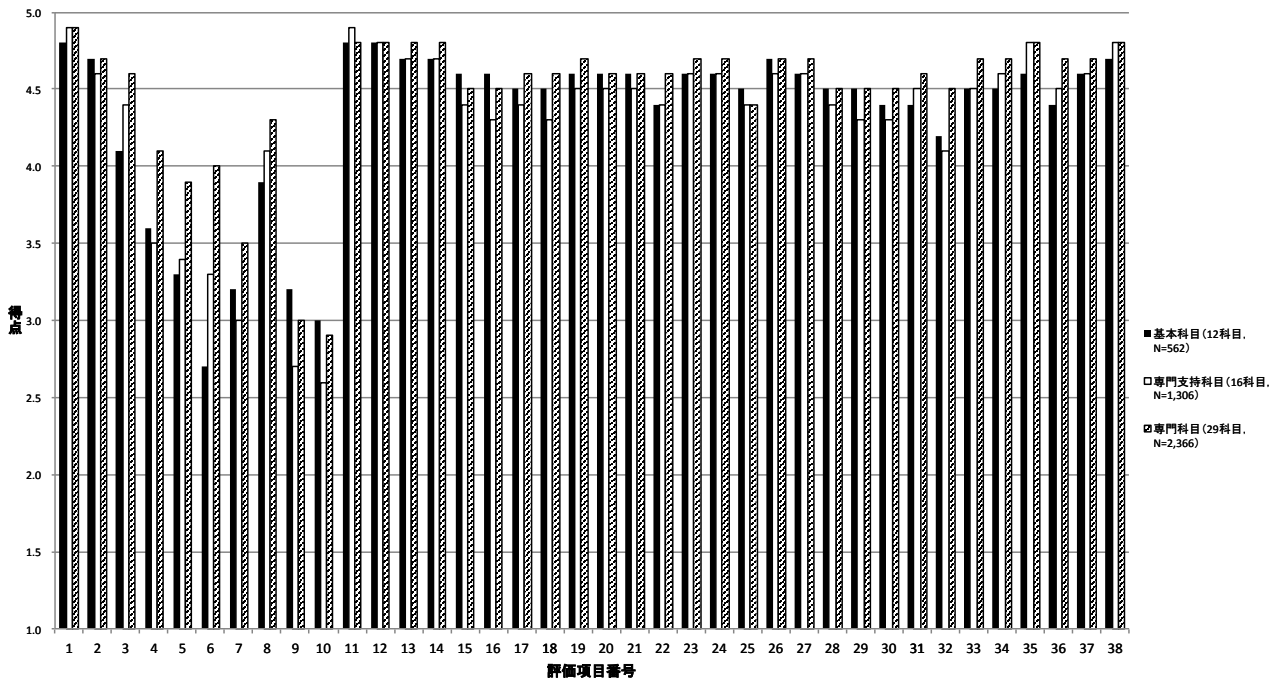


図4 必修科目における授業評価項目毎の平均点【基本科目、専門支持科目、専門科目別】

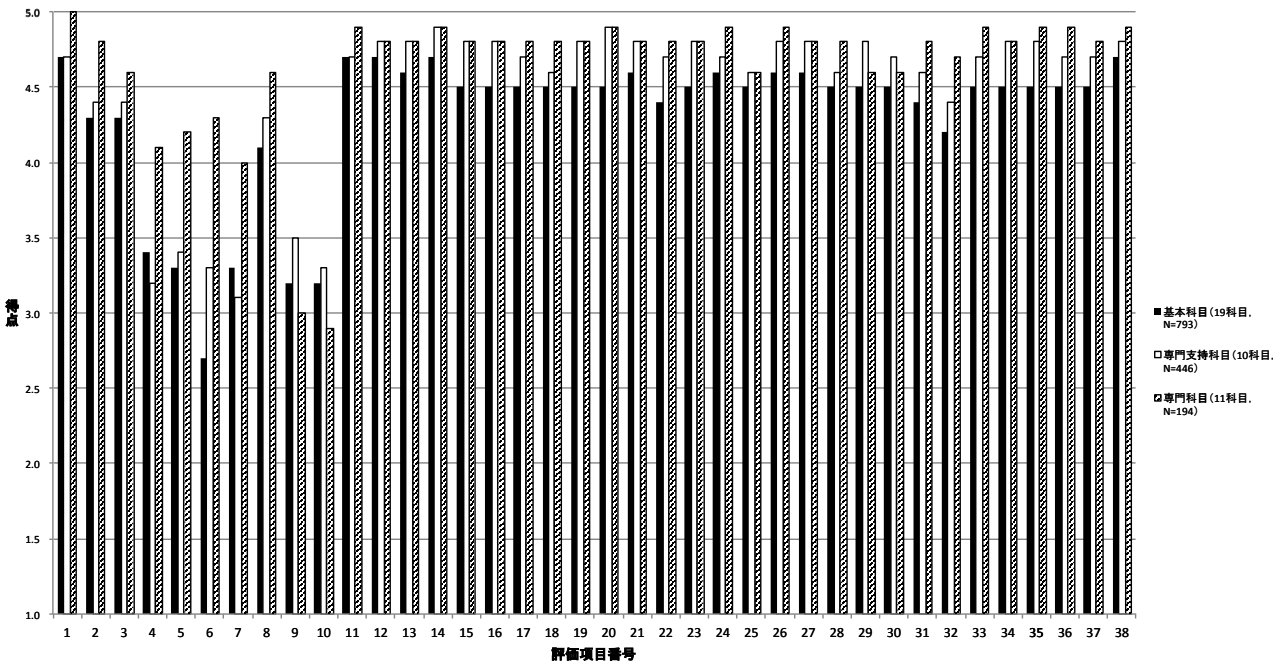


図5 選択科目における授業評価項目毎の平均点【基本科目、専門支持科目、専門科目別】

表1 各学年における必修・選択別および領域別の授業評価アンケート評価項目得点が4.0未満の項目と評価得点

	N	Q2	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q20	Q21	Q25	Q31	
1 年次	全科目(38科目)		4.6	3.5	3.3	3.0	3.1	4.0	3.1	2.9	4.5	4.6	4.4	4.4
	* 必修科目(17科目)		4.7	3.7	3.5	3.2	3.2	4.1	2.9	2.6	4.5	4.6	4.4	4.4
	・基本科目(7科目)	562	4.7	3.5	3.3	2.7	3.2	3.9	3.2	3.0	4.7	4.7	4.5	4.4
	・専門支持科目(8科目)	467	4.6	3.6	3.4	3.5	2.9	4.2	2.5	2.2	4.3	4.4	4.2	4.4
	・専門科目(2科目)	161	4.7	4.5	4.2	4.1	4.0	4.4	2.6	2.5	4.6	4.7	4.4	4.5
	* 選択科目(21科目)		4.6	3.3	3.2	2.8	3.0	4.0	3.3	3.1	4.5	4.6	4.4	4.4
	・基本科目(14科目)	700	4.6	3.3	3.1	2.5	3.1	3.9	3.2	3.1	4.4	4.5	4.4	4.3
	・専門支持科目(7科目)	385	4.5	3.3	3.4	3.5	2.9	4.1	3.5	3.2	4.8	4.8	4.5	4.6
2 年次	全科目(30科目)		4.5	3.8	3.8	3.6	3.5	4.4	3.1	3.0	4.8	4.7	4.5	4.7
	* 必修科目(22科目)		4.7	3.9	3.8	3.7	3.4	4.3	3.0	2.8	4.7	4.7	4.5	4.7
	・専門支持科目(8科目)	659	4.7	3.5	3.4	3.2	3.1	4.1	3.0	2.9	4.6	4.6	4.7	4.6
	・専門科目(14科目)	1,141	4.8	4.2	4.1	4.0	3.6	4.4	3.0	2.8	4.7	4.7	4.4	4.7
	* 選択科目(8科目)		3.8	3.6	3.6	3.3	3.8	4.6	3.4	3.4	4.9	4.9	4.7	4.8
	・基本科目(5科目)	93	3.6	3.9	3.8	3.4	4.0	4.6	3.3	3.3	4.9	4.9	4.6	4.9
	・専門支持科目(3科目)	61	4.0	3.2	3.5	3.1	3.5	4.6	3.5	3.4	5.0	4.9	4.8	4.8
3 年次	全科目(11科目)		4.7	3.9	3.7	3.9	3.3	4.2	3.2	3.1	4.6	4.6	4.4	4.6
	* 必修科目(11科目)	908	4.7	3.9	3.7	3.9	3.3	4.2	3.2	3.1	4.6	4.6	4.4	4.6
	・専門科目(11科目)	908	4.7	3.9	3.7	3.9	3.3	4.2	3.2	3.1	4.6	4.6	4.4	4.6
4 年次	全科目(13科目)		4.8	4.1	4.2	4.2	3.9	4.5	3.0	2.9	4.7	4.7	4.5	4.7
	* 必修科目(2科目)		4.7	3.7	3.7	3.9	3.4	3.5	3.0	2.8	3.8	3.8	3.9	3.9
	・専門科目(2科目)	156	4.7	3.7	3.7	3.9	3.4	3.5	3.0	2.8	3.8	3.8	3.9	3.9
	* 選択科目(11科目)		4.8	4.1	4.2	4.3	4.0	4.6	3.0	2.9	4.9	4.8	4.6	4.8
	・専門科目(11科目)	194	4.8	4.1	4.2	4.3	4.0	4.6	3.0	2.9	4.9	4.8	4.6	4.8

Q2:この授業に遅刻をしたことがない

Q4:この科目の予習、復習をした

Q5:教員に求められたこと以外に自分で積極的に調べた

Q6:この科目の勉強のために図書館をよく利用した

Q7:教員に積極的に質問をした

Q8:この科目はもともと興味のあった科目である

Q9:この科目の勉強はやさしかった

Q10:この科目で良い成績をとるのは容易だ

Q20:教員の話し方は明瞭で、聞き取りやすかった

Q21:教員の話す速度は適当であった

Q25:課題(宿題・レポートなど)の量は適当であった

Q31:この科目の受講後、この科目に対する興味は増加した

必修科目と選択科目の領域別では、Q2で選択科目が必修科目より低かったことは、選択の基本科目が影響していた。それに対して、必修の専門支持科目、専門科目および選択の専門支持科目では平均点が高かった。Q4～Q7では、必修、選択の区別なく専門支持科目の平均点が低かった。Q9、Q10では必修の専門支持科目、専門科目のいずれも低かった。

3) 3年次履修科目について

必修科目の専門科目のみが分析の対象となった。分析の結果、Q9、Q10の評価得点が特に低かった。

4) 4年次履修科目について

必修科目では専門科目のみとなり、選択科目も専門科目のみとなった。評価得点が4.0未満の評価項目の大部分で、必修科目が低かった。その中で、Q9、Q10においては、必修科目のみならず、選択科目も低かった。

IV. 考察

評価項目に対して「そう思う」のではない、と捉えていると考えられた4.0未満の評価項目が明らかとなった。そこで考察では、評価得点が4.0未満の項目について論じ、学生の評価を正確に反映する授業評価の評価項目について提案していく。

初めに1年次～3年次において、Q4～Q7において低い平均点となっていた。このことは、学生たちは授業に対して予習、復習を行わないことが、積極的に調べる機会が少なくなると同時に、教員への質問行動が乏しくなっていることにつながっていると考えられた。特に1年次では、選択科目の基本科目や専門支持科目において平均点が低く、2年次では必修科目、選択科目の専門支持科目で低くなっていた。3年次については必修科目の専門科目が低くなっていた。しかし4年次では、選択科目の専門科目では4.0以上であった。4年次が高いことは、11科目中5科目が助産に関連する科目であることや、卒業単位を満たすため選択した科目であることが影響していると考えられた。講義内積極的態度和受講態度、講義以外での学習に積極的であった学生は、授業の満足度が高い^{8),9)}。本大学の授業評価アンケートのQ33では授業の満足度を問うていることから、今後Q4～Q7とQ33の関連性についても検討していくことが必要であると考えられた。

続いて全ての学年において、授業の難易度を問うQ9とQ10が低い平均点となっていた。先行研究¹⁰⁾においても同様の傾向を示していた。ここで「講義の内容は易しすぎましたか」という設問は、読み手により解釈が異なる、あるいは評価が異なる項目の一つであることが指摘されている¹¹⁾。また学生による授業評価で学生に回答を求めているのは、評価や意見ではなく、学生の自分の「頭の中」の状態に関わる申告（報告）にすぎない¹²⁾との指摘もある。串本¹³⁾は、授業評価項目を分析するにあたり、教育目的の特徴として「到達型」と

「発達型」に区分している。「到達型」の教育目的で重要なものは成果であり、「発達型」では、学習者の能力等を一定水準に到達させることよりも、個々人における発達の程度を最大化させることに関心が払われる。この分類から本大学は、国家資格獲得に必要な水準を設定せねばならないことから、「到達型」の教育目的を掲げているといえよう。さらに串本は、「授業の難易度を問うということは、その回答如何により教育内容を変更する用意があることを示している。従って授業の難易度を問う設問は、発達型の教育目的が前提と考えることができる。」と述べている。このことから本学の授業評価アンケートにて、授業の難易度を問う評価項目は不要ではないかと考えられた。さらに、Q9とQ10の評価項目が全学年低い結果となったのは、Q4～Q7と関連していることも推測された。つまり学生たちは自ら予習、復習を行わず、積極的に調べたり教員に質問したりすることがないことが、「科目はやさしくない」、「良い成績を取ることは容易ではない」ということにつながったと考えられた。

以上のことから、Q4～Q7の評価項目は今後も使用し、Q9とQ10の評価項目の割愛を検討する必要性が示唆された。

V. 結論

平成22年度に開講された、実習科目以外の全授業科目の学生の授業評価結果について、学年毎、必修・選択科目毎、基本科目・専門支持科目・専門科目毎に得点の偏りや傾向を調べた。その結果、学生自身の授業への取り組みについての自己評価、特に講義への積極的態度が乏しい状況が明らかになった。そのことが授業の難易度を問う評価項目の得点が低いことと関係していることが考えられた。以上のことから、授業への取り組みについての自己評価や講義への積極的態度を問う設問は必要であるが、授業の難易度を問う評価項目の割愛を検討する必要性が示唆された。

引用文献

- 1) 安彦忠彦 (1991) : 大学における授業方法とその評価 - 授業改善のために -, 名古屋大学教育学部, 1-11.
- 2) 川嶋太津夫 (1991) : 学生による授業評価と大学の授業改善, 名古屋大学教育学部, 59-67.
- 3) 示村悦次郎 (1992) : 大学教育と授業評価 - 大学審議会の考え方, IDE現代の高等教育, 332, 14-17.
- 4) 文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室 (2011) : 大学における教育内容等の改革状況について (概要), 文部科学省, 21-22.
- 5) 関内隆, 縄田朋樹, 葛生政則, 北原良夫, 板橋孝幸 (2006) : 主要国立大学における「学生による授業評価」アンケートの分析, 東北大学高等教育開発推進センター紀要, 1, 41-54.
- 6) 牧野幸志 (2003) : 学生による授業評価の規定因の検討 (3) - 記名式による調査が授業評価に与える影響 -, 高松大学紀要, 40, 63-75.
- 7) 牧野幸志 (2003) : 学生による授業評価の規定因の検討 (1) - 授業者担当者への評価懸念のない場合 -, 高松大学紀要, 40, 77-87.
- 8) 牧野幸志 (2001) : 学生による授業評価と自己評価, 成績, 及び学生の満足感との関係 - 教養選択科目「社会心理学」の場合 -, 高松大学紀要, 35, 1-16.
- 9) 牧野幸志 (2001) : 学生による授業評価と自己評価, 成績, 及び学生の満足感との関係 - 専門必修科目「人間関係論」の場合 -, 高松大学紀要, 35, 17-31.
- 10) 花岡明正 (2010) : 授業アンケート結果の検討, 新潟工科大学研究紀要, 15, 65-70.
- 11) 小久保吉裕, 鈴木道隆, 永田正義, 佐藤邦弘, 川月喜弘, 内田仁 (2006) : 卒業生から見た好ましい授業評価アンケート項目, 工学教育, 54 (3), 149-154.
- 12) 宇佐美寛 (2004) : 大学授業の病理 FD批判, 東信堂, 147-172.
- 13) 串本剛 (2005) : 教育目的との対応にみる教育評価の妥当性 - 授業評価項目の分析を具体例に -, 大学教育学会誌, 27 (1), 124-130.